心臓をえぐりだした。

どくっ、どくっ、と脈打ちながら全身に血を送り込んでいるそのものを血管を引き千切りながら外気が触れる場所まで強引に連れ出す。そいつのどす黒い血を浴びながら、少女はその心臓かどうかも分らない物体をかるく握り潰した。少女の黒い手袋にはさまれた心臓はトマトのようにあっさりと潰れ、果肉のようにどろりとした血を吐き出した。少女は苦い血の味を舌に感じながら、そいつに挑戦的な目を向ける。

そいつは見事なまでに穿たれた穴を呆然と覗き込んでいた。霧のように血が噴出しているために見難いが、そいつの向こう側の景色を胸の穴を通して見ることができる。血が辺りに飛び散り、空気に触れたためか糞尿のような臭いを放ち始めた。

「ぐ、ぐがが……人間なんぞに」

そいつは背筋が凍りつくような怨みを言葉に埋め込みながらそう言った。そいつの頭には一本の小さな角が生えていた。そいつは人間ではない。妖の存在なのだ。髪の毛はほとんどないといってもいいほどに薄く、腹が異常に膨れている。何かに対する執着や怨みが凝り固まったような醜い顔をしていた。腹以外の部分には肉がついておらず、皮膚と骨だけで構成されている。爪は鍛え上げられた日本刀のように鋭く、黒く汚れていた。そいつは餓鬼とあだ名される妖（あやかし）である。

「お前が弱かった、ただ、それだけ。さっさとくたばりな」

低く押し殺した声でそう言い放ち、少女は餓鬼に近づいた。心臓を失っても生きてはいるが、もはや抵抗できる力も残っていないのか餓鬼はそのやに色に濁った目を少女に向けるだけだった。

近づいた少女の右手が一瞬、霞んだ。

次の瞬間。

信じられないほどの大量の血が餓鬼の餓鬼の首から噴き出した。

「うぎょべべべ」

生物が一度しかあげることのできない悲鳴を口から放ちながら、餓鬼の首が後ろに倒れた。かろうじて皮一枚で胴体につながっているが、そのことはどういった恩恵も餓鬼に与えてはいない。餓鬼の胴体は痙攣を繰り返しながら、地面に倒れ、それでもしつこく痙攣を続けていた。

まるでゴキブリのようだ、少女はそう思ったが、しかし、思い直した。ゴキブリのほうがこいつらに比べれば何倍もましな存在である。少なくともゴキブリは生きている人間を食い殺したりはしないだろう。

一分ほどで痙攣はなくななった。その途端、餓鬼の体がぼろぼろと崩れ始めた。砂漠の砂のような粒子の細かい状態にまで崩壊した餓鬼の体はあっさりと風の中に消えていった。

少女はあたりを見回した。

少女がいるのは小さな児童公園である。時刻はすでに深夜の二時を回っているため、誰の姿もない。もっとも、誰かいたとしたら大変な騒ぎになっているだろうが。

少女は公園の隅にいくと地面に突き刺さっていた奇妙な形のものを引き抜き、懐にしまいこんだ。公園のほかの三隅に突き刺さっていた奇妙なものを少女は同じようにして引き抜くと近くにある水飲み場に足を向ける。少女の全身は餓鬼の血で汚れていた。べとりとしたその血が気持ち悪いのだろう、少女は水道を最大にまで捻ると頭から水に突っ込んでいった。短く刈られた少女の髪に怨みとともにこびりついていた血が流されていく。餓鬼の血が放つ、腐ったどぶのような匂いは消えなかったが、それはあきらめるしかないだろう。水浴びをした犬のように頭を振って水を飛ばしながら、少女は天を見上げた。

別に餓鬼を哀れんだわけではないだろうが、黒い雲から大粒の雨が地上に向かって落ちてきていた。雨はあっという間に勢いを増し、雨が地面にぶつかる音で周りの音が聞こえないくらいの土砂降りになった。

少女は雨を避けることをせずに彫像のようにそこに立っていた。雨によって全身についた餓鬼の血を洗い流すつもりなのだ。

少女は天を見上げ、思い出していた。

あの日も、こんな土砂降りの日だった。

父と母を失い、自分が道に足を踏み入れたあの日。

あの日を思い出すときに少女は自分の体が熱くなるような怒りを禁じえなかった。

そう、自分はあの日、足を踏み入れたのだった。

修羅の道に。

殺魔師大神真　～外伝～
道に君臨するもの

彼女は頭が狂いそうになるくらいの混乱の中にいた。自分の身に何かが起こったのならば、彼女はここまで混乱しなかっただろう。彼女の混乱は娘が原因である、彼女の娘が家に帰ってこないのだ。いつもなら五時には家に帰ってきている、しかし、もうすぐ六時になろうというのに娘は帰ってくる気配がない。

あの子が約束を破るはずがない、と彼女は思う。何度も何度も自分でも嫌になるくらいにしつこく帰る時間についてはあの子に言い聞かせていた。それにあの子は水を持っているのだろうか、いつも渡している小さなペットボトルではそろそろ足りなくなるはずである。もし水が足りなくなったら・・・、それが導き出す運命を彼女は想像し、吐き気を催すほどの恐怖に襲われた。

何かに巻き込まれたに違いない。そうでなければあの子が帰ってこないはずなどないのだ。彼女は近くにあったミネラルウォーターのペットボトルを手に取ると放たれた弓矢のような勢いで外に出た。

やはり外に出すべきではなかった。もう少し体が慣れてから、外に出るのを許すべきだったのだ。過去の自分の判断を激しく悔やみながら、彼女は娘の痕跡をたどった。

娘がいつも遊んでいる場所は知っている。家の近くにある大きな空き地で虫を取ったりしながら遊んでいるはずだ。その空き地の地主が好意で作ってくれたブランコや、滑り台、砂場などがあるため彼女の娘のほかにも多くの人間の子供たちが遊びにきている。

公園に着いた。

もう六時になろうとしているからか、空き地で遊んできる子供の数は少ない。子供を迎えにきていると思われる母親の姿も何人か見受けられる。

しかし、彼女の娘の姿はなかった。

血相を変えている彼女に気がついたのか、集まっていた母親たちの中の一人が彼女に近づいてきた。娘さんがどうしたんですか、母親の直感なのだろうか、人間の女は彼女にそう喋りかけた。彼女はその母親の言葉に耳を貸さずに公園を走り出た。他人の手を借りる必要などない。彼女は娘の痕跡を追った。

彼女に無視された母親は何秒か呆然としたあと、大きな声で悪態をついた。

彼女は他人が見たら驚くような速さで道を駆けていた。事態は一分一秒を争うのだ、他人の目を気にしている場合ではない。

そうして五分ほどがたち、彼女はある家の前で立ち止まった。

この家の前で彼女の娘の痕跡は消えていた。それはつまり、娘がこの家にいるか、この場所から車か何かでどこかに移動したということになる。

まずこの家から確かめたほうがいい。彼女は乱れた髪を整えながらその家のインターホンを押した。返事はない。家の様子を窺ってみる、どの部屋にも明かりがついていない。留守の可能性が高いが、諦めきれない彼女は何度もインターホンを押し、すいません、と声を出した。

ドアを叩いている彼女に後ろから声がかかった。振り返ると、向かいの家の人間が窓から顔を出していた。中年の親切そうなその主婦は、その家の住人は今日引っ越した、と彼女に告げた。今日の昼過ぎに引越しのトラックで東京に向かったのだという。何故だか知らないが、あの子はそのトラックに乗ったに違いない。最近女の子の友達ができたと言っていたが、この家の子供がその友達なのだろう。あの子が無理やりついていったのか、それとも連れて行かれたのか。

彼女は巧みに嘘をまじえながら、向かいの家の女からこの家の住人に引越し先を聞き出そうとした。しかし、女は知らないという。そして、この家の住人には近所に親しい人もいないから誰も行き先を知らないのではないかとも言った。

彼女は女に礼を言うと家に向かって駆け出した。

行くのだ、東京に。

もう、手遅れかもしれない。その言葉を彼女は頭の外に弾き出した。

今、お母さんが行くからね。

そう、今東京にいるだろう娘に呼びかけた。

雨は降り止む気配を見せなかった。

雨によって冷やされたのか、大気が肌寒く感じられる。まるで夕立のように激しい雨が休むことなく地上に激突していた。地面を削り取るような勢いの雨は冷たいというよりも、痛いものだった。

１９９４年（昭和六十九年）　六月二十七日　午前二時三十七分

東京の記録的豪雨になりそうなその雨の中、一人の少女が傘をさすこともなく歩いていた。少女はむしろ雨を心地よく思っているのか、時折天を仰いでは顔に当たる雨の勢いにうれしそうな声をあげていた。

もしこの場に人間がいたら、少女の様子に驚いただろう。

どこにいても目立つ容貌を少女は持っているからだ。

少女の全身は傷跡にまみれていた。露になっている体のどの部分にも大小さまざまな傷跡がついている。特に両の手はひどく、傷跡のない場所を探すほうが難しく思えるほどだった。女性がもっとも気を使う場所である顔にもミミズが這ったような、醜い傷跡が残っていた。少女は左の目を失っているのか、その瞼はしっかりと閉じられていた。首には何かに肉を噛み切られたような跡があり、そこだけわずかに肉が盛り上がっていた。

少女はこんな時間に出歩いていたら補導されてしまうような年齢に見える。まだ、義務教育を終えていないだろう。顔には十分なほどのあどけなさがあるが、それ以上に何かに追いかけられているような厳しく張り詰めたもの、そして何かに対する明白な敵意を少女は持っていた。眉は太く、目も大きい。その目に睨まれたら、大の大人でも身が竦んでしまうことを避けられないだろう。

背は高く、百七十を超え、その全身を信じられないほどに発達した筋肉が覆っている。どうやって鍛えたら、ここまで筋肉がつくのだろう。常軌を逸した見事な肉体を少女は持っていた。

一匹の飢えた虎のような少女だ。

少女は黒い服の袖に鼻を近づけ、顔をしかめた。大きなバックを背負っているがその中に着替えはないのか、少女は諦めたような表情をして再び歩き出した。空間を埋め尽くしている雨によって視界をさえぎられているにもかかわらず、少女は何事もないようにまっすぐに進んでいく。

少女は強い雨にやられそうになっている電話ボックスへ、ゆっくりと入り込んだ。道路の上をまるで川のように水が走っている。このまま雨が降りつづければ東京は沈むかもしれないな、と少女は思ったが、いくらなんでもそこまで雨は降らないだろう。

懐からテレホンカードを取り出すと手馴れた様子で少女はプッシュボタンを押していく。このような時間にどこに電話しているのか。コール音が二回鳴った後、出た。

「もしもし、珠貴です。……ええ、終わりました。今から帰ります。……いえ、大丈夫で

す。では……」

少女、珠貴は受話器を置くと電話ボックスを出た。

彼女は先ほど、仕事を終えたばかりだった。珠貴の仕事、それは妖を狩ること、すなわち退魔行だった。珠貴はその若さにしてすでに一人前の退魔師なのである。電話をかけた相手は珠貴が属している教団である。世間的にはあまり知られていないその教団は退魔行をその生業としていた。退魔行の世界では珠貴が属している教団と大神家という陰陽師の集団が勢力を二分している。

珠貴は単純に強くなるためだけにその教団を選んだ。大神家には入れない理由があったからだ。教団は密教系に属す宗派だが、小難しいことは一切言わず、ただ人間がどこまで妖に対抗できるか、それだけを追及していた。珠貴はそこも気に入った。教団に入ってすでに五年が経過しようとしている。

自分は強くなったのだろうか、と珠貴は思う。多くの退魔師を抱える教団の中でも実力的に上のほうであると思うし、事実そうである。ただ、自分が強くなっていると思っても、珠貴は満足できなかった。そして、あの男の噂を聞くたびに思うのだ。自分はまだまだだと、そして焼けるような怒りと憎悪を思い出し、修行にふける。そうやって生きてきた五年間だった。同年代の少女がやっている遊びなど何一つ珠貴はやっていない。学校にも行っていないから、同年代の友達はいない。むしろそれは珠貴にとって幸運なことだった。同年代の退魔師がいれば、どうしても普通の少女たちの生活が頭に上ってしまうからだ。教団に属する退魔師の中で珠貴より年下の人間はいない。彼らとしか交流のない珠貴は自分は普通の人間と違う世界にいる、そう思うことで世俗を切り離してきた。もっとも、それは始めの一年ほどの話で、今はもう他人のことなど気にならなくなった。他人の目が気になるのだったら、顔に傷をつけられた時点でこの仕事をやめている。

しかし、早く着替えたいものだ、と珠貴は思った。さっき餓鬼を殺したときに服についた血がどうしようもないほどに臭うのだ。鼻が曲がると言う表現が身に染みて分かる。もう少し歩けば、教団の車が珠貴を迎えにくる場所に着く。着替えもあるはずだ。

珠貴は雨によって増水を始めた河に出た。もう少し歩けば、迎えがくる場所である。

しかし、その場所に着く前に珠貴は妙なものを見つけた。

足跡である。

もちろん、普通の人間の足跡がアスファルトの上に残るわけがない。珠貴が見つけたのは妖の存在がいた名残、いわば足跡のようなものだった。妖がいる空間には人間を不快にさせるもの、瘴気に満ちている。そういったものに敏感な人間は妖がいる場所では吐き気を覚えてしまう。足跡とはその瘴気が地面などにこびりついたもののことである。足跡は河の中から始まり、住宅地の中へと続いていっている。

珠貴は迷った。

このまま帰るか、それともこの足跡を追うか。

教団は妖、即ち、悪、という極端な姿勢をとっているが、珠貴はそこまで妖の存在自体を憎んでいるわけではなかった。人に害を及ぼしていなければ、放っておいて問題ないのではないかと思う。珠貴にとって退魔行とは己の力を高めるだけのものに過ぎない。しかし、このまま放っておいて死人でも出たら、少し寝覚めが悪い。

珠貴は跡を追うことにした。

瘴気の残り具合から考えると妖が河を出たのはそれほど前のことではないようだ。もしかしたら、長時間瘴気が残るほどに強力な妖なのかもしれなかったが。

性質のよく分かっていない相手と闘うのは危険である。仕事でやるのならば仕方がないが、無理にその危険を冒すのは愚行でしかない。今分かっているのは相手が水妖だということだけだ。何をやっているんだ、私は、珠貴はそう思いながらも足跡を追いつづけた。己の力を未知の妖に試したいのだ。珠貴は新しい言葉を憶えてそれを使いたがっている赤子のような自分が可笑しかった。

珠貴は足を速め、そして駆け足に変わった。

叫び声が聞こえたのだ。

走る。走る。駆け抜ける。

豪雨の中を珠貴は駿馬よりも速く駆け抜けていく。きれいに区画整理された住宅街の中を珠貴は迷うことなく走る。深い夜の闇も何ら彼女の妨げにならないようだった。何人かの人間が争う声が珠貴の耳に届く。常人であれば豪雨の音に遮られ、聞き逃してしまうようなかすかな声である

そして、珠貴は一軒の家にたどり着いた。

珠貴と同じように傘もささずにずぶ濡れになっている女が家の玄関に詰め寄っていた。その女が強引にドアを開けたらしく、切れたチェーンロックがむなしく垂れ下がっていた。女は雨に降られるまでもなくずぶ濡れだったに違いない、珠貴はそう思った。その女は河の中から出てきたのだから。妖が人間に化けていることは珍しくない。中には戸籍を持って人間として生活しているものもいるのだ。開発によって人間があらゆる場所に生活圏を広げたため、山などに住めなくなった妖が都市に降りてくるからである。

妖がドアをこじ開けた状態で立ち、その前に一人の中年男性が倒れている。倒れたときに頭でも打ったのか、気絶しており、右手が変な角度に曲がっている。人間はもう一人いた。三十ぐらいに見える眼鏡をかけた女性が、地面に尻餅を着いた状態で女を見上げている。その目には怯えしかなかった。女は明らかに殺気立っていた。珠貴が来なければ間違いなく、この家の住人たちは殺されていただろう。

常人には耐えられないほどの瘴気が辺りに立ち込めている。瘴気は水に解け、その性質まで変化させたのか、この家に降る雨はどこか粘り気を帯びているようだった。

女は珠貴の存在に気が付いているはずだった。取り立てて気配を消すようなこともしていないからだ。しかし、女は珠貴を振り返ろうとしない。人間の女性も動転しているのか、珠貴に気がついた様子はない。

「あの子を返しなさい。ここにいるのは分かっている」

「……あ、あの子って……知りません。あなたの子供なんか知りません」

「ここにいるのは分かっていると言っている。……しらをきるのなら勝手に調べさせてもらう」

そういって女は家に入り込もうとした。女の侵入を拒もうと女性が妖の足にしがみついた。女は女性を道端に転がっている邪魔な石でも見るような目で見た。

殺す気だ。

声をかけても妖の動きは止まらないと判断した珠貴はいきなり疾った。間合いを詰めながら、珠貴の右足が雨を裂き、地面からせり上がっていく。その蹴りを妖は避けようともしない。美しい弧を描くようにして珠貴の足が妖の側頭部を捉えていた。

妖の体が横に吹き飛ばされ、二メートルほど吹き飛ぶとレンガでできた外壁に激突した。唖然とした顔で女性が珠貴を見つめている。珠貴は女性に、大丈夫ですよ、と声をかけ、すぐに視線を妖に移した。

たいした外傷を受けた風もなく、妖はあっさりと立ち上がった。焼け付くような殺意の塊を珠貴に向ける。その目が変化していた。白目の部分が緑色に変わりつつある。薄い膜のようなものがその眼に作られつつあった。腕にも、美しく輝く翠玉色のものが現れていた。

うろこである。

「あっさり、人間じゃないってばらしていいの？」

何処か陽気な口調で珠貴が言った。戦闘に入り、気分が高揚しているのだろう。

「……邪魔をしないで。殺されたくないのなら」

「黙って殺されるつもりはないし、黙ってこの人が殺されるのを見ているつもりもないよ」

珠貴は一歩前に出ると構えた。肩幅ほどに足を開き、腰を落とす。両手を胸の前に持っていき、足をいわゆる猫立ちの状態にする。全身からほどよく力を抜き、外気を取り込む。

気。

中国の道教によれば、この世は気に満ちている。人間から、それこそどこにでもあるような石にさえ気は満ちているのだ。道教とはその気や他の物を利用し、仙人になろうとする学問である。気は、外気と内気とに分けられる。外気とは世界に満ちている気のことであり、内気とは人間が体の中に持っている気のことである。どれほど鍛えても内気の絶対量には限りがあるので、気を使うものは外気を利用する。外気を丹田に取り込み、体の中をまわしながらその力を高めていくのだ。仙道でいうところの小周天の法である。

この空間における珠貴の圧力が目に見えて強くなった。怒りや怨み、憎しみや怒り、様々な感情を含ん

だ暴力的な力の塊。珠貴の存在はそう変わっていた。

「退魔師か……余計なことなどしないほうが身のためだ」

「忠告はありがたいけど、ここまできてひくわけにいかないでしょ」

先に仕掛けたのは妖のほうだった。一気に間合いを詰め、右の腕を振るう。右腕の先には鋭い爪が付いている。珠貴はそれをよけることをしなかった。右の拳を繰り出し、妖の右腕の手首あたりを殴った。妖の攻撃が逸れた。そのまま踏み込む。そして珠貴の左の拳が爆発した。気を込めた左の拳を放ったのだ。

吹き飛ぶ、妖。

しかし、今度は壁にぶつかりはしなかった。珠貴の打撃が効いていないかのように空中で一回転し、両足で壁を蹴った。みしりという音とともに壁に亀裂が入る。

凄まじい勢いで妖は珠貴に向かって跳ね返ってくる。鋭い爪が珠貴の喉元を狙っている。避けることはできない。珠貴がその攻撃を避ければ、後ろにいる女性がその犠牲となってしまう。珠貴がよけないことを妖も分かっているのだ。珠貴は迷わなかった。素早く身を屈めた。珠貴の体が妖の下に入った。珠貴の腕が妖の右腕を取る。そして、投げ飛ばした。地面に激しく背を打ち付ける、妖。

しかし、打撃が意味をなさないことは証明済みである。珠貴の打撃を喰らい、妖の服の腹部が破れている。その腹部にびっしりとうろこが生えているのが見えた。うろこが打撃を防いでいるのだろう。

さすがに息ができないのか、妖の動きが一瞬止まっている。

玉子はバックから何かを取り出した。水筒である。珠貴は蓋を開けるとその中身を妖に向かってぶちまけた。鼻を突くような独特の臭いがその液体の正体を告げていた。

ガソリンである。

玉子は靴底を擦りつけるようにして妖の腹部を蹴った。火花が散る。妖の全身が燃え上がり、闇の中にその姿が浮かび上がった。珠貴は後ろに跳んだ。打撃が微塵も効果を及ぼさなかった妖もこの攻撃には取り乱した。

地面を転がる。しかし、火は消えない。その転がった跡に乾いて色のくすんだうろこがまばらに落ちていた。水妖であるだけに火に弱く、乾燥にも弱いようだ。妖は立ち上がった。慌て、隙だらけのその妖の前に珠貴が立っている。珠貴の右腕が霞んだ。

血が吹き出る。

うろこのはげた首筋を狙って珠貴が手刀を放ったのだ。しかし、わずかに浅い。妖が身を逸らし、手刀の当たりを半減させたのだ。それでも首の四分の一は切り取っている。珠貴の顔に血が降り注いだ。珠貴の顔に喜悦の表情が浮かんでいる。餓鬼ほど血は臭くないな、と珠貴は思った。

妖が思い切り後ろに跳んだ。形勢を不利と見て、逃げ出すつもりなのだろう。それを勝機と見た珠貴が後を追う。信じられないほど大きく、妖の口が開いた。

がっ。

鋭い呼気とともに妖が何かを吐き出した。咄嗟のことで珠貴の反応が遅れた。妖が吐き出したものは珠貴の足に当たった。それはまるで鳥もちのように珠貴の足を地面にくっつけた。

「貴様は必ず殺す」

妖はそういい残すとその場から逃げ去った。妖の体から火は消えつつあったが、首の傷が深いため、このまま闘うのは危険と判断したのだろう。

「あなたには無理」

珠貴は妖の背中にそう言った。美しく不敵な、戦乙女のような笑みを珠貴は浮かべていた。その顔にはたっぷり遊んだ後の子供のような充実感ともっと遊びたかったという不満が共存していた。

妖の姿が見えなくなってから、珠貴は足を鳥もち状のものから外そうとした。しかし、取れない。思い切り引っ張っても足は取れなかった。あのまま闘っていたら危なかったのはこちらだったかもしれない、珠貴は背筋が寒くなるような恐怖と興奮を覚えた。仕方なく、珠貴は靴を脱ぎ、足を自由にした。興味があったので鳥もち状のものを触ってみる。すでに固まっていたそれはゼリーのように嫌味ったらしく揺れた。次にあの水妖と闘うときにはこの攻撃に気をつけなければいけないな、と珠貴は思った。この攻撃を喰らえば珠貴が辿る道は死、一つだろう。

珠貴は振り返ると女性を見た。女性は化け物でも見るような眼で珠貴を見つめている。妖と珠貴の戦いを見たのだから当然の反応ともいえた。珠貴はできるだけ女性を安心させようと笑みを浮かべながら。

「今、目の前で起こったことは夢でも映画の撮影でも、特撮でもありませんから。現実です」

女性は壊れた人形のようにかくかくと首を縦に振った。このような反応に珠貴は慣れていた。人間、自分が考えもしなかったことに遭遇すればこうなってしまうものなのだ。

「安心してください、私は人間です」

珠貴はバックを探り、名刺を捜していた。教団が用意してくれたものである。もっとも、名刺に書かれている文面もかなり怪しいもので、この女性を安心させる役に立つとは思えないが。珠貴は女性に近づくと名刺を手渡した。

「こういった仕事をしています。……とりあえず怪我人がいるようだから、救急車を呼んだほうがいいですね」

女性は相変わらず、首をかくかくと振っていたが腰が抜けているのか、立ち上がることができないようだった。

結局、救急車は珠貴が呼ぶことになった。

珠貴は病院の待合室にいた。

病院には珠貴たち以外に急患はなく、待合室にいるのは珠貴たちだけだった。ほとんどの明かりを落としている病院の中は薄暗く、病院自体が何かに病んでいるように見えた。肝試しの場所として選ぶなら夜の病院か学校だろうなと珠貴は思った。

珠貴の隣にいる女性が顔を上げる。女性の名は青羽裕子、珠貴が水妖から救い出した女性である。あの後救急車を呼び、それに珠貴もついて来たのである。一度逃げたとはいえ、水妖がまた襲ってくるかもしれないからだ。女性の膝を枕代わりにして、小さな女の子が体に似合った小さな寝息を立てていた。その子供は裕子の娘で青羽千秋という。今年で五歳になると聞いた。家に置いてくるわけにもいかないので、裕子が起こして連れてきたのだ。ずっと寝ぼけ眼のままだったが、さっき本当に寝てしまった。

珠貴は裕子にもらった服に着替えていた。裕子も女性にしては長身のほうだがそれでも珠貴のほうが大柄である。珠貴は裕子がサイズを間違って買った大きな服を着ていた。下は裕子の夫のものだというジーンズをはいている。救急車がくる僅かな時間にシャワーを浴びさせてもらったから、餓鬼の血の臭いはようやく取れていた。まだ半乾きの髪の毛が蛍光灯に照らされて鈍り光を放っている。

我が子の髪を撫でながら、裕子が珠貴に目を向けた。裕子は何処か冷たい印象のある女性だった。その表情に翳りがよく見られるからかもしれない。

幸い裕子に怪我はなかった。怪我をしたのは裕子の父親である宗平だけだった。珠貴が見たところ宗兵も命に別状はなさそうだった。

「あれは何だったんですか。一体あの女の人……いえ、あれは人間じゃなかった。壁にぶつかっても平気で立ち上がってきましたもんね」

「……これから私が言うことは信じられないかもしれませんが、聞いてください。あの女は私たちが妖と呼んでいる存在です。ほかの言葉でいうと妖怪とか、化け物とかモンスターとか、ともかく多くの人がその存在を認識していない虎よりも強力な生物です」

「漫画や小説などでは見たことがありますけど、実際にいるとは思いませんでした」

「まぁ、普通はそうでしょうね。もともと妖は人間に比べて絶対数が少ないですから、普通の人間が探そうと思って見つかるものでもないですし。……私たちの仕事は人間に害を及ぼそうとする妖を退治することですが、その被害についてもそれほど多くあるわけではないんです。ただ、何十年かに一度くらい強力な力を持った妖が暴れだして、多くの死傷者が出ることはありますけど。妖に殺される人間の数よりも交通事故で死ぬ人間のほうが多いでしょうし。それでも人間はやっぱり、別の生物に殺されることに慣れていませんから私たちのような仕事が生まれたんでしょう。

大きく分けると妖は二種類にわけることができます。古来から人間とともに生き長らえてきた、この地

球に生まれた種としての妖。鬼とか河童とかがこの種類に含まれます。そしてもう一つは人間や他の生物の思いによって生み出された妖。口裂け女とか、人面犬などが後者にあたります。……所詮この分類も人間が決めたものですけどね。青羽さんを襲ったのは前者のタイプだと思います。あの強さから判断するとかなりの齢を重ねた水妖でしょう。もしかしたらどこかの神社で神として祭られているかもしれません」

「……神様なんですか？」

「あくまで可能性ですけどね」

神という言葉に衝撃を受けている裕子を楽にさせるため珠貴は軽くそう言った。神といってもキリスト教のような絶対神ではない。日本の土着神の中には妖に毛が生えた程度の存在も多いのである。

珠貴の心には引っかかるものがあった。

それは水妖が漏らしていた言葉だった。あの子がここにいるのは分かっている、そう水妖は裕子に言っていた。裕子は何も知らないようだったが、もし両者の間に何かしらの因果が生まれているとしたら仕事は格段にやりにくくなる。

頭の中を整理しているのか、俯いたままの裕子に珠貴が声をかけた。

「何故襲われたか、理由に少しでも心当たりがあったら教えて欲しいんですが」

「……あの女性にも言ったように私には本当に何の心当たりもありませんし、あの女性が言ったことにも何の心当たりもありません。さっきからずっと考えましたが、何のことだかさっぱり…」

「そうですか、家に戻ってから少し調べさせてもらえますか」

珠貴の言葉に裕子は神妙な顔をして頷いた。裕子が知らなくともあの家自体に何かあるかもしれなかった。少なくともあの家にいる誰か、もしくは何かが水妖と関わっていることは間違いない。妖は普通自分のほうからあまり人間と関わりを持とうとはしない。正体を現してまで人間と関わろうとした、それには余程の理由があるに違いなかった。

「失礼なことを聞くようだけれど、珠貴さんお年はいくつ？」

裕子が目を伏せながら言った。目を伏せていても裕子の目に今どんな表情が浮かんでいるか珠貴には簡単に予想できた。好奇心と猜疑心である。まだ年端の行かぬ珠貴が何故このような仕事をしているのか、そして本当に頼りになるのか。珠貴が水妖と戦うところを目の前で見ていても、その実力に不安を持っているのである。人は他人を実力ではなく、外見で判断しがちなのだ。珠貴の同僚にはいかにもまじない師といった格好で仕事に出かけているものがいる。それは胡散臭い格好をすることで相手を安心させようとしているのだ。往々にして退魔を依頼した人間はいかにもな格好をした退魔師が来ると思っており、普通の服装で行ったため珠貴は何度か拍子抜けされたことがある。

珠貴の場合は年齢が相手にとってもっとも不安の材料となる。退魔を始めた当初のころは一人で行っても相手にされないことが多かったので必ず誰かと組まされていた。今でも珠貴の年齢に不安を持つ依頼者は多い。それはもっともなことだと思うから、珠貴は自分から何も言いはしない。ただ、大丈夫だと依頼者に言い、依頼を果たすだけである。

「後一年で義務教育が終わるような年です。……学校には行ってませんけどね。年はともかく、実力ではそこらへんの退魔師には負けませんから安心してください」

「あ、ごめんなさい。そんなつもりで言ったんじゃないんだけど。ただ、その、こんな時間までつき合わせてご両親が心配してらっしゃらないかと思って……」

それこそいらぬ心配だと珠貴は思った。その思いが表に出てしまったのか珠貴の顔を見て裕子が怯んだ。慌てて表情を修正し、できるだけ感情を殺しながら。

「両親はもういませんから」

珠貴の平板な声に裕子は心底申し訳なさそうな顔をした。こういう言葉を返されたら裕子が今してるような表情に人間はなってしまうのだな、と珠貴は冷静に思った。一体今までに何度くらい自分は裕子が言ったような質問をされ、それに答えてきたのだろうか。

「ごめんなさい、本当に」

「別にいいですよ、知らなかったことですし。それにもう慣れましたから」

裕子はかける言葉が見つからなくなったのか黙り込んだ。珠貴も特に聞くことはないので口を閉じた。

しんしんとした沈黙が冷えた病院に満ちた。

かつん、かつん、という冷たい足音が珠貴たちに近づいてくる。

一人の看護婦が患者の家族を安心させるような笑みを浮かべながら近づいてきた。子供に膝枕をしているため、立ち上がれない裕子は仕方なく座ったまま頭を下げた。

「父がお世話になりまして」

「宗平さんの様態ですが、意識も取り戻しましたし、腕のほうは単純な骨折です。心配はないとは思いますが、強く頭を打ったということですので念のため検査入院していただくことになります」

裕子と看護婦は入院の手続きなどの話を続けていたが、珠貴の耳はその言葉を筒抜けにしていた。宗平が無事と分かっただけで珠貴にとっては十分である。目の前でむざむざと人間を殺されずに済んだからである。

珠貴の頭は妖をどうやって殺すかに占められていた。

時計を見ると十一時を少し過ぎていた。

獣のような滑らかな筋肉を確かめるようにしながら、珠貴は腹筋を使って軽やかに上半身を起こした。全身の神経を集中し、どこも痛んでいないことを確かめる。左の腿の筋肉が張っているような気がしたが、それ以外に体の変調は感じられなかった。続けて珠貴は深海のような深呼吸をした。朝起きてまずすることは外気を体に取り込むことである。それによって体が今すぐにでも戦闘状態に入ることができる。

珠貴が寝ているのは裕子の家の一室である。物置のような状態になっている部屋だ。裕子は引っ越してきて間もないらしく、多くのダンボールがその部屋で開封されるのを待っている。珠貴は布団を畳むとダンボールの上に置いた。

まだ家の間取りがよく分かっていない珠貴はふらふらと歩き始めた。東京の郊外とはいえ、この家はかなり大きいといえた。

そういえばお腹が空いているな、と珠貴は思ったが、丁度よく台所に入り込んだところだった。台所では裕子が何をするでもなく、心を失ったような顔で椅子に座っていた。珠貴が近づくと驚いたように顔を上げた。

「おはようございます」

短く刈った髪を手でくしながら珠貴が頭を下げた。つむじの部分に寝癖がついており、どうも直りそうにもなかった。

「おはようございます。……そういう時は熱いタオルで蒸らすと直りますよ」

一瞬きょとんとした顔をした珠貴だったが、寝癖のことを言っているのだと分かりあいまいな笑みを返した。

裕子は珠貴の返事を待たずに台所を出るとタオルを取ってきた。ポットから熱湯を出し、タオルを濡らす。そして湯気の出るタオルを素早く珠貴に手渡した。珠貴はそのタオルを受け取るとゆっくりと頭に巻いた。

「今、千秋が近くのお好み焼き屋にお昼、買いに行ってるから、申し訳ないんだけど朝ご飯は用意してないの」

「そこまで気を使ってくれなくて結構ですよ」

「飲み物なら冷蔵庫にあるけど……」

裕子の行為を無駄にするのも失礼にあたる、と思った珠貴は冷蔵庫を開けると牛乳を取り出して、コップに入れた。珠貴も椅子に腰を下ろし、裕子に目を向ける。

強い雨の音が外から響いてくる。

昨夜から雨は降り続いている。このまま後一日ほど降り続けば、東京全体に被害が出る可能性がある。珠貴は妙な粘着性を持ったその雨をにらみ付けた。あの水妖の力によってふらされている雨かもしれなかった。あの水妖は天候を左右する力を持っているはずだからだ。雨は明らかに水妖を有利に働き、その分珠貴は不利になるだろう。

「引っ越してきたばかりなんですね。まだ開けてないダンボールがいっぱいありましたし」
「ええ、三日前に引っ越してきたばかりなの。引っ越したといってもここは私の実家なんだけどね」
そう言うと裕子は複雑な笑みを浮かべた。
「引っ越した途端にこんなことが起こって……祟られてるのかな、私」
「そんなことはないと思いますけど。昨日引っ越してきたということは水妖とあなたたちの因果はこの場所ではなくて前住んでいた場所でできた可能性が高いですね」
「……それはないと思います」
おずおずとしかし、確信をもった声で裕子が言った。裕子のその確信に満ちた声に得心のいかない珠貴は問い詰めるような目で裕子を見た。その視線に促されるようにして裕子は口を開いた。
「実家に戻ってきたのは主人が死んだのが一番の理由ですが、それだけじゃないんです。私、向こうでまったく友人ができなかったんです」
「私もほとんど、友人はいませんけどね」
裕子の気持ちを軽くするため、珠貴は少しおどけた調子でそう言った。言っていることは事実であり、珠貴はほとんど同年代の知り合いがいないので必然、友人も少なくなる。親しくしてもらっている教団の人間は大勢いるが、あくまで彼らは職場の同僚に過ぎない。
「……公園デビューって珠貴さん知ってますか？」
「一応は……あれですよね、子供を遊ばせるための公園での人付き合いみたいなもののことでしょ」
突然の質問に面食らいながらも珠貴はそう答えた。
「そう、あれってワイドショーとか週刊誌だけの話じゃないんです。……私はその公園デビューにものの見事に失敗したんですよ。いや、前住んでたところは公園じゃなくて空き地だったから、空き地デビューといったほうがいいかもしれませんけど」
「失敗したからってどうなるんです？」
珠貴にとってはそれがそこまで重要なことには思えない。もう子供ではなく立派な親なのだから、そんなやこしい事など抜きにして普通に付き合えばよいではないか。
「年をとったからって別に人間は成長するわけじゃないのね。私はその空き地に集まる母親たちのリーダー格の人になぜか目の敵にされたのよ。それで爪弾き。私だけじゃなくて千秋も子供たちから無視されるようになったわ。親があの子と遊んじゃいけないって言ったら、子供ってあっさり言うことを聞くものだから」
「信じられない。裕子さんを無視するように言ったその人、一体何考えてるんだ」
怒気を孕んだ声で珠貴が言う。余程腹が立っているのか声を荒げている。
「そういう人もいるのよ」
当事者である裕子のほうが珠貴よりも冷めた口調をしていた。珠貴は大きく息をつき、その息とともに無意味な怒りも吐き出した。子供を教育すべき親がそんないじめのようなことをするなど信じがたいことだが、裕子の言うように人間は年をとったからといって成長するわけではないのだ。向上心、そして自分が生きるべき道を見定めていなければ人間は上にいけないのだろう。
「私はそれでも我慢できたんだけど……、デザイナーの仕事をしてるからそっち関係の友達はたくさんいたし。可哀想なのは千秋だった。私は家にいるからなるだけあの子と遊んであげるようにしてたけど、やっぱり同年代の友達がいないのは寂しかったと思う。……あの子、まだ子どもなのにどこか気を使うところがあるから、口に出したりはしなかったし、たまに空き地にも行ってたみたい。友達はきちんといるって私に思わせたかったのかもしれない」
「しっかりしてるんですね。……私が子どものころなんてどうしようもないごんただったようなきがする」
「しっかりしすぎなのも親としては少し物足りないけどね」
裕子はそういって微笑んだが、早熟な娘を誇りに思っていることはその表情から十分に読み取れた。裕子は夫が死んでこっちに越してきたと言った。彼女が時折見せる翳りのある表情はそれに起因しているのかもしれない。

「そんなわけだから、私は前の土地じゃ、人を怨みこそすれ、怨まれるようなことはしてないと思うんだけど」

「確かにそうですが、思いもよらないことで妖と繋がりを持ってしまうことはあるんですよ。……すこし、訊ねにくいんですが、ご主人の死因は何だったんですか？」

裕子の顔にうっすらと翳りが見えた。珠貴はふと、ほんの一時期だけ自分の母親になってくれた女性を思い出した。彼女もまたどこかに翳りを持っていた。そして珠貴がその女性の翳りを消す前にその女性は永遠の闇に飲み込まれてしまった。珠貴は脳が軋むような気がした。あのことを思い出すたびに怒りは心の許容量を超え、体の外に漏れ出してしまう。

「主人はある病気で死にました。十万人に一人か二人かかるくらいの珍しい病気で……気づいたときにはもう手遅れでした。入院して三日目にあっさり……」

「そうですか……だとしたら、裕子さんが妖と因果を持ったわけではないかもしれませんね。お父さんとは一緒に暮らしてたんですか？」

「いえ、父は一人でこの家に住んでましたから」

「とすると、一応、娘さんにも話を聞いておく必要がありますね」

「娘にですか……」

裕子は子どもを守る母の顔になった。少しでも今回のことから娘を遠ざけていたいのだろう。その気持ちは十分に汲み取れたが、珠貴にとって重要なのは妖を退けることである。どんな些細なものであれ、自分に有利に働く情報は手に入れておきたいのだ。

「心配なのは分かりますが、情報をできるだけ集めておきたいので。あと、この家を調べさせてもらえますか。可能性は薄いと思いますがこの家に原因があるかもしれないから」

「ええ、分かりました」

そう言うと裕子は窓の外に目を向けた。雨の勢いは衰えるどころか次第に強まっているようだった。

「ひどい雨……ここは河が近いから心配だわ」

「……私にとっても不利ですから、あとでこの雨、止ませてみます」

さらっと言った珠貴のその言葉に裕子は疑問を感じなかったのか、そうね、と軽い返事を返しただけだった。

がちゃり

とドアが開く音とともに小さな女の子の、ただいま、という大きな声が家の中に響き渡った。

珠貴は裕子と千秋が唖然とするような速度でお好み焼きを食べ終えた。

食べれる時にできるだけ食べておく癖がついてしまったので知らぬ間に食事の早さが尋常ではなくなってしまったのだ。

「……消化によくないから千秋ちゃんはゆっくり食べたほうがいいよ」

苦笑いを浮かべながら珠貴はそう言った。

「こんなにはやくご飯たべるのはじめて見た」

千秋は賞賛の眼差しで珠貴を見つめている。そのどんぐりのような純粋な目で見つめられ、珠貴はばつが悪かった。食事を速く食べ終えることはけして良いことではないからである。

「ねっ、お母さん。お姉ちゃんすごく早いよね」

「そうね。でも、千秋は無理せずに普通に食べていいのよ」

「うん、分かってるよ。むりは体にどくだもんね」

その言葉の意味が本当にわかっているのか知らないが、千秋はそういうと自分のお好み焼きに拙い箸を伸ばした。裕子が困ったようなそれでいて誇らしげな微笑を珠貴に向けた。父親が死んで間もないだろうに千秋には父の死を背負っているような暗さが微塵もなかった。裕子はこの少女の底抜けの明るさにずいぶんと助けられているに違いない。

「水もらっていいですか」

珠貴はゆっくり立ち上がると台所へ向かった。

「冷蔵庫にミネラルウォーターあるから」
「いえ、蛇口捻ったらいくらでも出るやつでいいですよ」
珠貴は適当にコップを二つ手にとると水道の水を入れた。そして部屋に戻り、自分の鞄を取ってきてもとの場所に座った。鞄の中からいくつか小さなビンを取り出す。商標は書かれていないがそれは明らかに薬のビンだった。しかし、珠貴が取り出した量が尋常ではない。様々な色のカプセルや、錠剤、粉末のものもある。
珠貴は黙々と薬を飲み始める。見るだけで風邪が治ってしまいそうなほどの量の薬を珠貴は飲み込んでいく。再び、裕子と千秋の箸が止まってしまった。珠貴にとってはこの薬の量はいつものことであるので歯を磨くような淡々とした動作で順序良く薬を飲んでいく。
玉貴が薬を飲み終えたとき、千秋が小さな唇をどうにか動かした。
「こんなにお薬をいっぱい、のむのもはじめて見た」
そういって今度は病人を見るような目で珠貴を見た。
「お姉ちゃん、どこかびょうきなの？」
千秋の頭の中では薬は風邪を引いたときに飲むものと決まっているらしい。もっとも、千秋が飲む薬はまだ薬用シロップのはずである。ピンクや、オレンジなど今になって思えばどう見ても体に悪そうなシロップを珠貴も飲んだ記憶がある。
「違うよ、これはね、お姉ちゃんが強くなるための魔法の薬なの」
「ふーん」
よく分からなかったのか、千秋はそれ以上の反応を返さなかった。裕子は珠貴が飲んでいるものが何の薬なのか分かったのか、色を失った顔で珠貴を見つめている。強くなる薬、そして異常なまでの珠貴の肉体を見てすぐに思い当たったのだろう。
「千秋もそれのんだらつよくくなれるの？」
そういって薬に伸ばしかけた千秋の手を慌てて裕子が掴んだ。思わず力がこもってしまったのか千秋が顔をしかめる。
「いたいよ、お母さん」
「ご、ごめん。千秋はその薬を飲んじゃだめなの」
「どうして？」
千秋は素朴な疑問を返した。子どもは何でもどうして、どうしてと知りたがる。親はそれに答えるために苦労してしまうものだ。それはが疑問に感じることを大人はあまり疑問に感じないためでもあるだろう。しかし、裕子が何も言えないのは答えを知らないからではない。
言えなくて当然だ、しんでしまうかもしれないから、などとは。
「二つ、訊くね。千秋ちゃんは明日何がしたい、って考えるかな？」
珠貴が助け舟を出した。もちろん本当の理由をしゃべるつもりはない。はぐらかすつもりだ。本来子どもには物事をきちんと教えるべきだが、教えなくていいこともある。
「うん、考えるよ」
戸惑いながらも素直にそう答えた。
「そう。じゃあ、だめかな。明日のことを考える人はこの薬を飲んじゃだめなの。これは特別な薬だから。今日のことしか考えちゃいけないんだ。……それと千秋ちゃんの夢なに？」
「お母さんみたいにでざいなーになるの。あとね、ケーキ屋さんにもなる」
「そう、じゃあやっぱり千秋ちゃんはこの薬を飲めないね。この薬はただ一つの夢しか持ってない人にしか飲めないから。分かった？」
「よくわかんないけど、お姉ちゃんのひとつのゆめはなに？」
「お姉ちゃんの夢はね……すんごく悪いやつをやっつけること」
珠貴の脳に閃光のようにして一人の男の顔が浮かんだ。思わず手に力が入り、骨が軋むような怒りが染み出してくる。骨の髄にまでやつに対する怒りは詰っているようだった。
「千秋ちゃんはいっぱい夢を持っていいんだよ」

そういって珠貴は千秋の頭を優しく撫でた。

珠貴は家の中を見回っていた。

もちろんただ見ているわけではない。妖のものが残す僅かな痕跡を見つけようとしているのである。意識を集中し、虫眼鏡ですべてを拡大するようにしながらゆっくりと見回っていく。珠貴の隻眼が妖しく輝いていた。

珠貴は二階から、見回りを始めたのだが、しかし、痕跡はなかった。

階段をゆっくりと下りていく。必ずどこかに痕跡はあるはずなのだ。あの水妖が探していたものは余程大事なものであるに違いなかった。そして、そこまで大事なものがいる場所を間違えるわけがないのだ。必ずある、珠貴は諦めることなく一階に下り、そして探し始めた。台所へ行き、居間へ行き、そして風呂場も見て回った。が、痕跡は何も発見できなかった。残る部屋は珠貴が休んでいた今は物置になっている部屋だけである。珠貴はダンボールがパズルのようにして置かれている部屋に入り込み、その一つ一つを入念に見る。昨日寝るときには何の注意も払っていなかったので何があるか分からない。このダンボール群の中に水妖の探しているものがいるかもしれないのだ。

そして珠貴の目は針の先ほどの細さの痕跡を発見していた。余程注意してみていなければ見逃してしまいそうなほどの痕跡であり、しかも、その存在は薄くなりつつあった。珠貴はそのダンボールを降ろすと封をしているガムテープを剥いだ。そして開ける。

しかし、中に不自然なものはなかった。

冬物の衣類が詰っているだけである。妖のものの痕跡はない。妖はこのダンボールの中にいたのではなく。外側に触れていただけのようだ。つまり、妖は裕子たちが乗ってきた引越し用のトラックの荷台に潜んでいたということなのだろうか。トラックを調べている時間はなさそうであるから、確信をもつことはできないが。

裕子や千秋に聞いても分かることではないように思えた。家の中にある痕跡はこれで全てだろう。雨は激しく降ってはいるが、一応外も調べておいたほうがいいだろう。

外に出て行こうとする珠貴に声がかかった。

千秋である。

裕子は病院に宗平の着替えなどを持っていっているために今は家にいない。珠貴は一応、修平にも心当たりがないかどうか聞いてくれるよう裕子に頼んでいる。千秋は幼いころにしか浮かべることのできない自然な笑顔で珠貴に近寄ってきた。千秋はあまり人見知りをしない性格なのか、珠貴にも親しげに声をかけてくる。珠貴は子ども好きだが、子どもから見ると珠貴の肉体は恐怖に映るのかまともに喋ってくれない子どもがほとんどである。

「お姉ちゃん、いっしょに遊んで」

珠貴は一瞬の逡巡の後、微笑みながら頷いた。外を調べるのは後でもできる。遊びながら千秋からいろいろと聞き出したほうがよいだろう。

「でも、今外は雨だけど……」

「だから、家の中で遊ぶの」

千秋はそういうととことこと人形のように居間に向かって歩き始めた。小走りになりながら、何度か珠貴のほうを振り返る。珠貴は心も体も柔らかくなるような感触を抱きながら千秋の後に続いた。

千秋は居間に入るとテレビが置かれている小さな棚から珠貴にはよく分からない機種のゲーム機を取り出した。ゲームなど見るのは本当に久しぶりだった。教団にはテレビもないため、必然ゲームなどある筈もない。ゲームを最後にしたのはいつだったかな、と珠貴は考え、おそらく教団に入る二ヶ月ほど前だろうと思った。

「お姉ちゃん、ゲームできる？」

「できることにはできるけど、千秋ちゃんの相手になれるかどうかはわからないな」

千秋は幼いが、小さな子でもゲームがうまい子どもはたくさんいるだろう。もう何年もやっていない珠貴など時代に取り残されているはずだ。

千秋は戸棚の中から一本のカセットを取り出し、ゲーム機に差し込んだ。
いわゆる対戦格闘ゲームらしく、千秋は珠貴にコントローラーとそのソフトの取扱説明書を手渡した。
珠貴はとりあえず説明書を読んでみたが、さっぱり要領を得ないので諦めて赤ん坊に触るようなぎこちない動きで初めて見るコントローラーを握った。珠貴がやっていたころよりもボタンの数が倍以上に増えている。まだ小学校に入っていない千秋であるから説明書の内容は裕子にでも聞いたのだろう。しかし、コントローラーを握るその姿は割合と様になっていた。
そして、ゲームを始めた。

「お姉ちゃん、弱いね」
どこか感心したような声で千秋が言った。千秋が手加減してプレイしていたはずだが、それでも珠貴は手も足も出ず、それゆえ今の千秋の言葉を否定できる要素はない。珠貴が選んだ大男は千秋の選んだ華奢な天使にぼこぼこにされた。
「ずっとやってなかったからね」
「ほんとは強いのにね」
千秋はそう言ってから、しまった、という顔になる。
「千秋ちゃんが二階の窓から見てたのは知ってるよ」
珠貴は微笑みながらそう言った。千秋は水妖と珠貴の戦いを見ていたのである。あれだけ騒いでいれば目も醒めるだろう。見ていたことを裕子に知られたらよくないと思い、黙っていたのだろう。それを思わず言ってしまったわけだ。
「なぁんだ」
千秋は安心した顔をした。
「お母さんにはいわないでね。しんぱいするとおもうから」
どこまでも母のことを気にかけているようである。賢い子どもだな、と珠貴は思った。しかし、千秋は甘えることを知らなすぎるとも思った。子どもが甘えることを知らないのはけして幸せなことではないだろう。
「うん、話さないって約束するよ」
「ありがとう、お姉ちゃん。お姉ちゃんはてんしさまだね」
千秋にとって珠貴はゲームに出てくる天使のように強く、美しいものに映ったようだ。珠貴はその言葉に照れくさそうな顔をして笑った。
「そのかわり、今から聞くことに正直に答えてくれるかな」
千秋は体力の無駄遣いと思えるほど元気に頷いた。珠貴もまだ十分に若いが、それでも小学生などを見ているとそのパワーに圧倒されてしまう。自分もそうだったのだろうが、一体どうしてあんなに元気が有り余っているのだろう。疲れたら電池が切れるようにして眠り、体力を回復する。今はもうそんなことは無理だろう。
「千秋ちゃんは私が戦ってた相手を知ってる？」
「ううん、しらないよ」
「そう、全然？」
「うん、ぜんぜん。みたことなかったよ」
「千秋ちゃんがこっちに引っ越してくる前に変なことなかった？」
千秋は小さな頭を捻りながらどうにかして珠貴の質問に答えようとしているようだった。
「へんなこと……、ない」
「そう。そっか、教えてくれてありがとう」
これ以上聞いても千秋を混乱させるだけだろう。珠貴ができることといえば後は家の外を見回るくらいだろう。もっとも情報が集まらなくとも水妖にやられるつもりなどまったくない。情報収集はあくまで退魔の成功率を上げるだけのものだ。
「こっちに来る前、千秋ちゃんも大変だったんでしょ」

珠貴はできるだけ負担をかけないような口調でそう言った。千秋はころころと笑うと。
「そんなことなかったよ。お母さんがしらないだけで千秋にはちゃんとともだちがいたもん」
「そうなんだ、よかった」
珠貴はこころからその言葉を漏らした。千秋ぐらいの年頃の子どもに友達がいないというのは本当にかわいそうなことだと思うからだ。
千秋が手を引っ張ってきた。
「またゲームしよ。お姉ちゃん、つよくしてあげる」
思わず苦笑した。

二時間ほどがたち、裕子が帰ってきた。
珠貴は千秋の手を借りながら、あることの準備をしていた。そのために必要な道具は一時間ほど前に教団から届けてもらっていた。珠貴は居間の中央に置かれていたテーブルを横にどけ、縦横の長さが一メートルほどの箱を置いていた。その箱の中は水で満たされており、東西南北に向けて門が立っていた。その門の北面には曼荼羅が掛かっていた。
珠貴は行者が着るような浄衣を着ていた。そして、その浄衣は見事な空色に染め上げられていた。珠貴は様々な食べ物が乗った盆を箱の前におき、その中から梨を取り出すと水の中に沈めた。
千秋は好奇心で張り裂けそうなほど目を開いている。裕子は何をしているのか気になったようだが、珠貴の真剣な表情を見て口を閉じたまま千秋の横に腰を下ろした。
珠貴は手馴れた様子で作業を続けていく。
珠貴が火をつけると不思議な香りが部屋に広がり始めた。珠貴は目の端で千秋が顔をしかめるのを見た。子どもにとってあまりいい匂いとはいえないだろう。千秋は懸命に手を振って匂いを追い出そうとしている。
手を胸の前で組み合わせると、人差し指を立て他の指を組み合わせた。大きく息を吸い、それとともに外気を体内に取り込む。取り込んだ外気は丹田にこめ、ゆっくりと全身のチャクラに回していく。そうすることによって外気は体の中で増幅されるのだ。
「タニヤタ・ウダカダイバナ・エンケイエンケイ・ソワカ…」
珠貴は低く、三千世界に満ちるような力強い言霊を発し始めた。千秋が目を輝かせながら珠貴を見、うれしそうに母の顔を見た。裕子は我が子の頭を撫でながら珠貴を見守っている。
珠貴の真言はひたすらに続いた。
千秋が完全に飽き、うつらうつらし始めたころ、ようやく詠唱は終わった。千八十回、珠貴はその真言を唱えたのだった。珠貴は立ち上がると裕子たちの方を振り返った。
「私の願いがきちんと水天に届けば雨は止むはずです」
「すいてん？」
「水の神様のこと」
「……雨が止むの？」
「そうよ、お姉ちゃんの願いがきちんと届いたらね」
珠貴が確信をもって雨が止むといえないのはその自信がないからである。珠貴は何度か止雨法を行ったことがあり、失敗することはありえないのだが今回は相手が悪い。あの水妖は雨を操るすべに長けているに違いないからだ。それにあの水妖は生まれ故郷では水神として崇められていたかもしれない。相手の得意分野で勝てるとは思えなかった。ただ、やるだけやってみる価値はある。珠貴の予想では五分とまではいかなくとも十分力の通じる相手のはずだ。
「お母さん、そと行っていい」
「お外は窓からでも見えるでしょ」
「そとに行きたいの、いいでしょ。あめがやむの見たい」
千秋は頑固なのか我侭なのか、一度言い出したことはどうあっても譲ろうとしないようだった。何度もせがまれた裕子は諦め顔になり、しびしぶ了解を出した。千秋は跳ねるようにして玄関へと向かった。慌

てて裕子が追いかけていく。あの様子では傘もささずに外に飛び出るに違いなかった。
「さてと、着替えるか」
珠貴は誰に言うともなしに呟くと着替えに向かった。いつまでも儀礼用の衣装でいたところで仕方がない。

着替えた珠貴が外に出るとピンク色の小さな傘をさした千秋が恐る恐る水溜りに足をつけているところだった。地面は限界まで水を吸い込み、完全なぬかるみと化していた。いくらでも泥団子が作れそうな状態である。
雨は相変わらず、激しく降り注いでいた。
「どれくらい、時間がかかるんですか？」
「今まで二回やったことがあるんですが。その二回はすぐに効果が出ましたけど・・・はっきりとは分かりません」
そう珠貴が言う。長靴を履かされている千秋は水溜りの中に自分から突撃し、水を撒き散らしている。
「あめ、やめー」
千秋が大きな声で叫んだ。
だからというわけでもないだろうが、雨はゆっくりと小降りになり、一分も経たないうちに霧のような雨に変わった。
「うわー、やんだ。お姉ちゃん、すごいよ。やっぱり、てんしさまだ」
千秋はそういってはしゃぎ回り、黄色い長靴に泥水がかかっては下に流れ落ちた。
「ほんと、お姉ちゃんすごいわね」
裕子も驚いた顔で空を見上げている。依然として重量感のある黒い雲は天を覆っているが、落ちてくる雨の量は信じられないくらいに減少した。
珠貴も驚きながら空を見上げていた。あまり効果を期待していなかっただけに自分でもびっくりしてしまったのだ。
「今のうちに買い物に行こうか、千秋」
「うん」
「珠貴さんも一緒にどうですか」
珠貴は一瞬断ろうと思ったが、自分を見ている千秋の視線に気づき、その懇願するような視線に思わず首を縦に振ってしまっていた。
千秋はうれしそうにまた。水しぶきをあげ、水溜りには波紋が広がった。

水玉模様の可愛らしいレインコートを着た千秋が地面に足を擦るようにして歩いていく。足で水を切りながら歩いていくのが楽しくて仕方がないらしい。黄色い長靴がまるで船のように水面を裂いている。
雨は小雨になってはいるが、今までのの降雨量が尋常ではなかったため、下水は水を吸いきれず、道路は半ば川のようになりつつあった。都市部は意外に水に弱いのだな、珠貴は自分が止雨法をしなければ沈んでいただろう都市を見ながら思った。
「お母さん、きょうのばんごはんはなに？」
「まだ決めてないの、千秋は何がいいの？」
「千秋はね、お姉ちゃんにきめてほしい」
珠貴のことが余程気に入っているのか、それとも子どもなりに気を使っているのか、千秋は珠貴を振り返りながらそう言った。
「珠貴さんは何がいいですか」
「・・・・じゃあ、豚肉の生姜焼きで」
珠貴はおずおずとそう答えた。珠貴が二番目に好きな料理である。教団は特別な修行時以外肉を食べることを禁じてはいない。動物性のたんぱく質を取らなければ力強い肉体を作ることができないからだ。
「じゃあ、そうしますね」

裕子はにっこりと微笑んだ。珠貴は照れくさそうに頭を下げた。
目の前を中学生に見える少女の集団が歩いている。彼女たちはほとんど靴下を水につけた状態で無駄なほどに騒ぎながら道を歩いていく。本人たちがどう考えているかは分からないが、傍から見ているとこれ以上ないくらいに幸せに見える。
あんなことがなければ、自分もあの集団の中にいたのかもしれない、珠貴はそう思った。全身に傷跡をつけることもなく、女性とは思えない筋肉の束を全身に纏うこともなかったのだろう。
しかし、楽しそうな少女たちを見ても一片として憧れの念は湧いてこない。普通の生活に憧れるような段階はとっくの昔に通り過ぎてしまった。
自分に必要なものが珠貴には分かっているからである。
力。
珠貴に必要なのはただそれだけである。それ以外のものは何も必要ない。
少女たちを見る。彼女は制服を思い思いに着崩して、何かの話で盛り上がっている。その話の一部分として珠貴が生きている世界にはないものだろう。
珠貴は少女たちを見て思う。
あれは力か。否、あれは力ではない。力でなければいらないのだと。
珠貴はそうやって前に出てきた、そしてこれからもそれは変わらない。
一度その道に落ちてしまったら、もう二度とそこから抜け出すことはできないのだ。あの男を追い詰めるため、珠貴はその道から抜け出すつもりはなかった。
スーパーについた。
今では珍しくなった個人経営のスーパーである。個人経営の割には大きな店舗だった。
千秋は自動ドアを自分で開けそうな勢いで店に入ると籠を取り、裕子に渡した。
「おかしのとこ、いってるね」
「一つだけよ」

裕子の言葉に背中を向けたまま返事をすると千秋は駆けて行った。
ビニール傘をたたみながら珠貴は千秋の姿を見送った。
スーパーは徐々に忙しくなってくる時間なのか、客の入りはまずまずだった。赤く値段のかかれた値札がいたる所に貼ってある。山積になった特売品は誰かが持っていってくれるのを待っているようだった。たこ焼きの売店があり、そこからソースの濃厚な香りが漂ってきていた。
スーパーに来るなど久しぶりだな、と珠貴は思う。何か買うときは大概コンビニを利用している。どこにでもあるため仕事中に寄るのに丁度よいからだ。今回の依頼は千秋がいるためか、久々に何かをすることが多い。気がぬるまないように注意しなくてはならない。所詮、普通の生活など珠貴には無縁なものであり、必要ないものなのだ。
特にすることのない珠貴は裕子の後についていくことにする。
「お父さんが亡くなったばかりだというのに、千秋ちゃんは元気ですね」
話題を作るために言った言葉だったが、裕子の表情が曇った。
「……あの子も私と同じで複雑な気分だと思います」
裕子はきちんと並べられたトマトを手にとって確かめながら小さな声で言った。トマトはどれも個性がなく、同じような形のものが並んでいる。珠貴はその同一性が妙に気になった。
珠貴は言葉を挟まずに裕子が次の言葉を喋り始めるのを待った。
「ほとんど家に帰ってこない人でした」
亡夫のことを言っているのだろう。裕子の声は小さく、離れた場所でマネキンをやっている中年女性の声よりも聞き取りにくかった。
「恥ずかしい話ですけど、夫には愛人がいましたから、たまに家に帰ってくるのも何か会社で必要な物を取りに帰ってくるだけでした。私にはデザイナーの収入がありましたから何度か離婚しようと思ったんです。……ですが、夫の実家が世間体を異常なほど気にする人たちでどうしても離婚ができなくて。千秋にとって父親はたまに帰ってくるよく分からない人に過ぎなかったと思います」

そう言った境遇を微塵も感じさせないだけに千秋の純粋な明るさは痛々しく思えた。
「そんな状況が続いているときにあの人が死んで……こんなこというのはどうかと思うんですが、私、全然悲しくありませんでした。私が涙も見せないものだから、千秋もどう反応していいのか分からなかったんでしょうね。あの子には悪いことをしたと思っています。でも、これからの生活では千秋を大事にしていこうと思ってます。親馬鹿にならない程度に」
裕子はそう言って微笑んだ。その笑みは未来を感じさせる明るさを持っていた。
「私が言うのも変ですけど、うまくやっていけると思いますよ」
「ありがとう」
その後は普通に買い物をし、レジにまできた。
しかし、千秋はお菓子を持って戻ってこなかった。
裕子の顔に不安の表情が浮かぶ。たとえ一瞬でも一人にするべきではなかったか。そう、珠貴が慙愧の念を抱いたとき、千秋の明るい声が耳に飛び込んできた。
「お母さん」
千秋は裕子と同じくらいの年齢の女性に連れられていた。その傍らにはその女性の子どもであろう少女が立っていた。
「ああ、遼子。ごめん、千秋が何か面倒かけなかった？」
裕子の口調からするとその女性は知り合いであるようだった。今の家は裕子の実家であるわけだから、近くにいる友人もいるだろうし、その友人に子どもがいても何の不思議もない。
千秋と遼子と呼ばれた女性の子どもは楽しそうにじゃれあっている。
「裕子、千秋ちゃんからあまり目はなさないほうがいいわよ。今もなんか変な女の人に声かけられてたんだから」
裕子と珠貴は顔を見合わせた。
「その人どこにいるの」

裕子の問いに遼子が答える前に珠貴はその存在を感じ取っていた。
凄まじい殺気が体に突き刺さったからである。
目が合う。
水妖がそこにいた。
スーパーの外、傘もささずに立っている。
よほど隠形の法に長けているのか、向こうから殺気を放つまで珠貴はその存在を感じることができなかった。人間に混じって生活しているのだから隠形の法に長けているのは当然かもしれないが、ここまで近くにいて水妖の存在を感知できなかった自分に珠貴は怒りを感じていた。
水妖はそののっぺりとした顔に薄い笑いを浮かべると空を指差した。
空からは霧のような細かい雨が降っている。水妖はゆっくりと空を仰いだ。
その瞬間。
雨が一瞬にしてダムの放水のような激しい勢いに変わった。雨とは思えないほどの轟音があたりに響く。スーパーにいる客のほとんどが慌てて外を見た。
激しい雨をその体に受けながら水妖は挑戦的な目を珠貴に向けた。雨の勢いを弱めたのが珠貴であると水妖は気づいているのである。
水妖は天を指していた指を胸の前に持ってくると突き刺すような仕草をしてみせた。
殺してやる、水妖は珠貴にそう言っているのだ。
珠貴が追おうとする前に水妖は身を翻し、豪雨の中に消えていった。
「最近気持ち悪い人が多くて困るわねぇ」
遼子のその呟きに答えを返すものはいなかった。
珠貴は自分の手が妙に汗ばんでいるのに気がついた。
嫌な汗だった。

［　続　］